項目別の状況

資料６

Ⅰ　教育に関する目標
デザインと看護に共通する「人間重視」の考え方を基本に、「D×N」の特色を生かしながら、デザイン分野においては、問題解決能力や企画力を含む幅広いデザイン能力を持った職業人の育成を、看護分野においては、医療の高度化に対応する知識・技術に加え、問題解決能力を有し他職種と連携できる職業人の育成を行う。

中期目標
1　専門職業人の育成
幅広い分野におけるデザイン能力の活用や地域包括ケアシステムの構築などの多様なニーズや課題、グローバル化の進展、情報通信分野等の技術革新に対応し、地域や仕事の現場で活躍できる実践能力を備えた専門職業人を育成する。
また、大学院では、地域や仕事の現場を先導できる高い問題解決能力や、高いマネジメント能力を備えた高度専門職業人を育成する。

項目番号	中期計画	年度計画 P(計画:Plan)		実施結果・判断理由等	年度評価	中間評価	期末評価	評価委員会の指摘・意見等
1	・デザイン学部と看護学部の学生が協働して、地域の現状や課題を知り、その解決手法を提案する地域志向科目を連動させることにより、地域に貢献できる人材を育成する。 【指標】 卒業時に地域の課題発見、解決提案する能力が身に付いたと認識した学生の割合:65%/年	【2018年度】重点取組項目 ・両学部の学生が協働して地域課題に取り組み、それぞれの専門性を理解しながら異分野連携に必要な基礎的知識・技術・態度を習得する2年次前期開講科目「学部連携基礎論」、その基礎を踏まえて課題解決プロセスを習得する3年次後期開講科目「学部連携演習」等の地域志向科目を、シラバスに基づき着実に実施する。 ・「学部連携演習」の成果について、卒業時の教育評価アンケートを基に経年的な検証を行う。		【2018年度】 ・2年次前期開講科目「学部連携基礎論」をシラバスに基づき実施した。授業計画・内容どおりに第6～12回目はグループワーク、第13～15回は学習内容の発表と討論を実施した。科目担当者数12人にゲストスピーカー3人を加えた計15人によって授業を行った。 ・3年次後期開講科目「学部連携演習」をシラバスに基づき実施した。授業は8月から実施し、例年同様、個人活動評価票を使用した。「学部連携基礎論」を履修した学生が当該科目を履修したため、2つの科目間で継続性をもった取組が一部にみられた。 ・卒業時の学生を対象に卒業時の教育評価アンケートを実施した。 ・「学部連携基礎論」の本来の授業形態は「講義」であることを踏まえ、本学学則や履修規則等の規程類を再確認の上、次年度以降の授業計画・内容等について、「学部連携演習」とのつながりも含め後期に検討を行い、次年度以降の科目運営の改善を図った。 ・「学部連携演習」の開講は「後期」であるため、本学学則や履修規則等の規程類を再確認の上、次年度以降の授業スケジュールについて検討を行い、次年度の授業は後期ガイダンス日から実施することとした。	Ⅲ			
		(成果指標) ・卒業時に地域の課題発見、解決提案する能力が身に付いたと認識した学生の割合:65%	○	(成果指標の達成状況) ・卒業時に地域の課題発見、解決提案する能力が身に付いたと認識した学生の割合56.8%(D51.5%、N62.1%) (平成29年度卒業時の教育評価アンケートから) ※平成29年度から「学部連携基礎論」を開講している。これを履修した学生が平成30年度に「学部連携演習」を履修し平成31年度の卒業となることから、平成31年度の卒業時教育評価アンケートの結果も確認する必要がある。				
		【2021年度】 ・両学部の学生が協働して地域課題に取り組み、それぞれの専門性を理解しながら異分野連携に必要な基礎的知識・技術・態度を習得する2年次前期開講科目「学部連携基礎論」、その基礎を踏まえて課題解決プロセスを習得する3年次後期開講科目「学部連携演習」等の地域志向科目を、シラバスに基づき着実に実施する。 ・「学部連携演習」の成果について、卒業時の教育評価アンケートを基に経年的な検証を行う。		【2021年度】 ・2年次前期開講科目「学部連携基礎論」を地域課題発見能力を修得するという科目のねらいに沿ったシラバスに基づき実施した。また、授業ガイダンス等において受講者に科目のねらいを周知した。なお、新型[illegible]め遠隔授業とした。実施した講義においては、ウェブアンケートシステム(Microsoft Forms)を[illegible]り、インタラクティブな授業運営を実現した。 ・3年次後期開講科目「学部連携演習」を専門性理解・異分野連携力・課題解決力を修得するという科目のねらいに沿ったシラバスに基づき実施した。また、授業ガイダンス等において受講者に科目のねらいを周知した。新型コロナウイルス感染症対策のため遠隔授業とした。南区10地区を対象に地域課[illegible]か[illegible]じめ地域から聞き取った課題や過年度の取組の成果を学生へ[illegible]備を行った。 ・教務・学生連絡会議において、2020年度卒業時の教育評価アンケートを基に「学部連携演習」の経年的な検証を行った。卒業時に地域の課題発見、解決提案する能力が身に付いたと認識した学生の割合は84.9%(デザイン学部は76.0%、看護学部は93.8%)であった。 ・2020年度卒業時の教育評価アンケートでは、設問の言い回しや評価尺度の見直しを行った。集計にあたってはそれぞれの設問に対して「大いに身についた」「身に付いた」「少し身についた」の3つの項目を「身に付いた」として合算した。	Ⅲ Ⅳ			
		(成果指標) ・卒業時に地域の課題発見、解決提案する能力が身に付いたと認識した学生の割合:65%	◎	(成果指標の達成状況) ・卒業時に地域の課題発見、解決提案する能力が身に付いたと認識した学生の割合は84.9%(デザイン学部76.0%、看護学部93.8%)であり、指標を上回って達成した。(2020年度卒業時の教育評価アンケート結果より)				
		【中期計画の進捗状況に関する特記事項】 ・「学部連携基礎論」は、「学部連携演習」との違いが学生にとって分かりにくいという問題があった。その問題を解消するため、「学部連携基礎論」では科目のねらい、到達目標、授業内容等の見直しを行い、2つの地域志向科目を効果的に連動させて運用できるよう改善した。						
		【2022年度】 ・両学部の学生が協働して地域課題に取り組み、それぞれの専門性を理解しながら異分野連携に必要な基礎的知識・技術・態度を習得する2年次前期開講科目「学部連携基礎論」、その基礎を踏まえて課題解決プロセスを習得する3年次後期開講科目「学部連携演習」等の地域志向科目を、シラバスに基づき着実に実施する。 ・「学部連携演習」の成果について、卒業時の教育評価アンケートを基に経年的な検証を行う。		【2022年度】 ・2年次前期開講科目「学部連携基礎論」をシラバスに基づき実施した。なお、授業は対面と遠隔の併用とし、前半10回の両学部教員よるプロジェクトマネジメント・調査手法・地域分析等に関する講義を行った後、「札幌市まちづくり戦略ビジョン・アクションプラン2019」の重点プログラムから4つの課題を取り上げ、それらの課題ごとのグループに分かれ、地域課題の解決に対する基礎的能力を養うことをねらいとして実施した。 ・3年次後期開講科目「学部連携演習」をシラバスに基づき実施した。授業は、学内での演習を対面と遠隔を組み合わせて行うとともに、地域での学外活動も小規模となるよう配慮しながら対面で行い、両学部合同のグループ活動により南区の地域課題への解決に取り組んだ。また、対面形式としては2年ぶりとなる最終発表会を実施した。 ・教務・学生連絡会議において、2021年度卒業時の教育評価アンケートを基に「学部連携演習」の経年的な検証を行った。卒業時に地域の課題発見、解決提案する能力が身に付いたと認識した学生の割合は95.3%であった。学部別では、デザイン学部は95.2%、看護学部95.4%と両学部ともに高い割合であった。				
		(成果指標) ・卒業時に地域の課題発見、解決提案する能力が身に付いたと認識した学生の割合:65%	◎	(成果指標の達成状況) ・卒業時に地域の課題発見、解決提案する能力が身に付いたと認識した学生の割合は95.3%(デザイン学部95.2%、看護学部95.4%)であり、指標を上回って達成した。(2021年度卒業時の教育評価アンケート結果より)				
		【2023年度】 ・両学部の学生が協働して地域課題に取り組み、それぞれの専門性を理解しながら異分野連携に必要な基礎的知識・技術・態度を習得する2年次前期開講科目「学部連携基礎論」、その基礎を踏まえて課題解決プロセスを習得する3年次後期開講科目「学部連携演習」等の地域志向科目を、シラバスに基づき着実に実施する。 ・「学部連携演習」の成果について、卒業時の教育評価アンケートを基に経年的な検証を行う。		【2023年度】 D(実施状況:Do) C(検証・課題:Check) A(今後の取組:Action)				
		(成果指標) ・卒業時に地域の課題発見、解決提案する能力が身に付いたと認識した学生の割合:65%		(成果指標の達成状況)				
		2022年度の実績に関する評価委員会からの指摘事項等 ・次期中期計画においては、リベラルアーツを重視した取組、特にAI活用、大きく社会を俯瞰し貢献できるような人材の育成に期待したい。		2022年度の実績に関する評価委員会からの指摘事項等に対する対応				
		【中期計画の実施状況や指標に関する特記事項】						

参考）過年度評価結果

年度	評価	指標
2018	Ⅲ	○
2019		○
2020		○
2021		◎
2022	Ⅳ	◎

期末評価
評価委員会評価
（Ⅳ～Ⅰを記載）

大学の自己評価

これまでの年度評価（結果）

指摘や意見等を記載
※評価結果が大学の自己評価と異なる場合の理由は必須

指標の達成状況を記載
◎達成（100%以上）、○達成、×未達成（80%未満）

昨年度の評価と対応状況

期末評価が「Ⅳ」の場合は中期計画を上回って達成したと判断できる具体の成果、「Ⅱ」又は「Ⅰ」の場合は達成できなかった理由や今後の対応等

３　項目別評価

３－１　大学の教育研究等の質の向上に関する評価

(1) 評価結果及びその判断理由
ア　評価結果
A

大項目ごとに集計
S：特筆すべき進捗状況にある（評価委員会が特に認める場合）
A：計画どおり進捗している（すべてⅣ又はⅢ）
B：おおむね計画どおり進捗している（Ⅳ又はⅢの割合が９割以上）
C：やや遅れている（Ⅳ又はⅢの割合が９割未満）
D：重大な改善事項がある（評価委員会が特に認める場合）

イ　判断理由
小項目すべてがⅣ評価又はⅢ評価であるため。

小項目数	評価結果				Ⅳ又はⅢの割合
	Ⅰ 実施せず	Ⅱ 十分実施せず	Ⅲ 十分実施	Ⅳ 上回って実施	
23	0	0	14	9	100%

事務局とりまとめ